震災後の生きざま追う

東日本大震災から12年。東北の被災者の生きざまをたどったドキュメンタリー映画が、「3・11」の前後に相次ぎ上映される。

記録映画、相次ぎ公開

東日本大震災12年

飯舘村 べこやの母ちゃん

酪農家行く道 別々に

「飯舘村 べこやの母ちゃん」の一場面 ©Mizue Furuyu 2022

「飯舘村 べこやの母ちゃん」は、東京電力福島第1原発事故で全村避難を強いられた福島県飯舘村の酪農家の女性3人を追う。

牛と共に県内の別の村に移った人、村外に転居しながら、飯舘の畑に通い野菜作物を育てる人。避難指示解除で飯舘に戻ったものの、夫を亡くしがんで亡くした人。それぞれの苦しみや強さを手帳に記録した。

監督の古居みずえは、中東パレスチナの難民の女性を長年取材してきた。「どんな状況でもたくましく生き抜いていく姿」は福島の女性に重なるという。

フォーラム福島（福島市）で31日公開予定。

ただいま、つなかん

民宿の女性 慕う人々

監督・一色真司の「ただいま、つなかん」は、気仙沼市の民宿「唐桑御殿つなかん」に集う人々が共に歩んできた歩みの記録だ。

夫とカキを養殖していた女性は、津波で被災した自宅をボランティアの学生たちに宿舎として開放。後に民宿に改修し前に進むが、東日本大震災が起き、さらなる不幸が降りかかる。それでも、女性を慕い移住してきた若者らに支えられ、前を向く。

気仙沼の復興を支援する作業の現場がナレーションを務め、女性と交流のあるコピーライターの糸井重里らも登場する。

フォーラム仙台（仙台市青葉区）などで公開中。全国で順次公開。

「生きる」大川小学校津波裁判を闘った人たち

遺族の活動を追体験

児童や教職員計84人が、亡くなった石巻市大川小の津波被害を扱ったのは、「『生きる』大川小学校津波裁判を闘った人たち」である。

児童の遺族が学校側に過失があったとして市と県を提訴。2019年に事前防災の不備を認める仙台高裁判決が確定した。

監督の寺田和弘は児童の父母の信頼を得て、市教育委員会の説明会などを記録した映像を入手。自らの取材と併せ、「あの日、何があったのか」を追究する遺族の活動を観客が追体験できるように構成している。

全国で順次公開中。宮城県ではフォーラム仙台で11日公開予定。

「『生きる』大川小学校津波裁判を闘った人たち」の一場面 ©2022 PAO NETWORK INC.